

## 空海と丹生明神

真言密教のカリスマ教祖である空海は、仏教界では特別の存在だ。遣唐使として唐に渡った当時、すでに高名な僧であった最澄。同じ密教の開祖である最澄と比して、同行した空海は、無名の一学問僧に過ぎなかった。しかし、語学に優れ、三筆に列せられるほどの能筆家であった空海は、短期間のうちに密教の奥義を伝授され、20年の留学予定を短縮し、わずか2年で帰国した。このように天賦の才に恵まれていた空海は、また、朱(硫化第二水銀)に関連した伝承の多い人物でもあり、彼の足跡と水銀との関連を伺わせる史料も少なくない。果たして、空海は、どれほど水銀のことを知っていたのだろうか。

### ●空海を高野山に導いた2柱の神

空海が高野山を開くにあたり、2人の人物に道案内されたとの伝承がある。2人は高野明神と丹生明神の化身だったと言われ、別けても高野山周辺の地元神である丹生明神は、空海に現在の伽藍がある土地を譲った恩人とされている。丹生明神(丹生都比売神)は、朱の採掘を生業とする丹生氏が信仰した神ということから、「水銀の神」と考えられており、神功(じんぐう)皇后の三韓(朝鮮半島)遠征に際し、この丹生明神が、銚や舟を赤く染める土を与えて軍威を高めたとの言い伝えもある。紀ノ川から高野山へ続く長い参道の途中にある丹生都比売神社は、丹生明神を祀る神社の総本社であり、ユネスコ世界遺産の一部としても登録されている。

空海が(あくまでも仮定だが)水銀に関わっていたとするならば、その手助けをしたのは、この丹生氏の一族とも考えられる。全国にある「丹生」の名前を含む地名や施設は、朱に縁があることが考古学的にも確かめられており、例えば伊勢の丹生鉱山は、大仏の鍍金(めっき)用に水銀を上納したことで知られ、縄文時代から水銀採取地で



丹生都比売神社(和歌山)

ある徳島の若杉山遺跡周辺は丹生谷と呼ばれている。高野山では、丹生明神が、信仰の中心である壇上伽藍に守護神として祀られている。

### ●空海は中国の神仙思想の影響を受けたのか?

空海が留学した唐では、神仙思想が盛んであった。唐代は、不老長寿を信じて何人もの皇帝が水銀を飲んでいて時代であり、空海もまた、水銀に関する知識を持って帰国したに違いない。水銀は、朱の顔料として絵画や建築物に使われるとともに、鍍金(めっき)の材料としても利用されていた。また、中国の煉丹術(不老長寿の薬を作る術)では、金や銀より価値があるものとされており、高価な材料であった。西洋的価値観であれば「金・銀・銅」の順になるところが、中国では「朱・金・銀」の順であったため、朱を求めて山に入るというのは、当時の人にとっては自然な感覚だったのかもしれない。

空海は、生まれ故郷である四国から奈良末期の平城京に上った。若い頃の空海は、吉野(和歌山県)や出生地である四国で山林修行をしつつ勉学に励んでいたとされるが、中央構造線上のこのあたりは水銀の産地で、縄文時代から朱を採掘していた記録が残っている。修行中の彼が、山中で朱に関して見聞していたとしても不思議ではないし、その経験から、中国的価値観を受容できたであろうことも頷けるのではないだろうか。

高野山にお参りすると、根本大塔をはじめとして、朱塗りの立派な御堂が目を引く。空海は、ここで入定(にゅうじょう:永遠の瞑想の意)し、今でも奥の院で禅定を続けているとされ、毎日食事が差し入れられているそうである。果たして彼が、水銀を飲んで不老長寿の身となったかどうかは誰にも分からない。